房総の文化財

VOL.11
平成8年11月25日
財団法人　千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡809-2
TEL 043-422-8811(代)
FAX 043-422-8850
ISSN 0910-0848
Bōsō no bunkazai

発掘調査速報

今も昔もニュータウン～印西市船尾白幡遺跡

千葉県の北西部にある千葉ニュータウンは、今新しい街づくりがどんどん進んでいるところです。その中心となる印西市の南部に船尾白幡遺跡があります。

現在発掘調査中ですが、今までに弥生時代や平安時代の家の跡などが多く見つかっています。

千葉ニュータウン関係の発掘調査が進むにつれ、この地域の昔の様子が少しずつわかってきました。それによると、この船尾白幡遺跡と近くにある鳴神山遺跡には平安時代の初めころ(約1,200年前)に人が住み始めたようです。家や倉庫などの跡が見つかっていることから、当時のムラの一部であったことがわかります。ここは、いわば古代のニュータウン。つまり、昔から人が生活するにふさわしい場所だったと言えます。

遺跡の調査中に写真のような焼けた土や炭が埋まった平安時代の家の跡が見つかりました。これは、屋根を支える材料などが焼け落ちたものです。火事のためなのか、あるいは引っ越しの時の片づけで家を焼いたのかも知れません。当時の家の造り方を知る手がかりになります。

この遺跡で、8月31日に「来て！見て！歩く！歴史の散歩道－船尾白幡遺跡見学会－」というテーマで遺跡の見学会を行いました。近くからはもちろん、県内各地から250人あまりの方が見学にみえました。全長800mの見学コースを自由に回り、調査中の弥生時代や平安時代の家の様子を見学しました。

出土品コーナーでは、「くるる鍵」という錠を開ける鉄製品の使い方（これについては、〔Q＆A〕に詳しい説明があります）や、墨で文字の書かれた土器についての質問が多くありました。

千葉県文化財センターでは、発掘中の遺跡の見学会を年に数回開いております。是非、お気軽にご参加ください。

船尾白幡遺跡

見つかった平安時代の家のやけ跡

船尾白幡遺跡見学会の様子

収蔵遺物コーナー

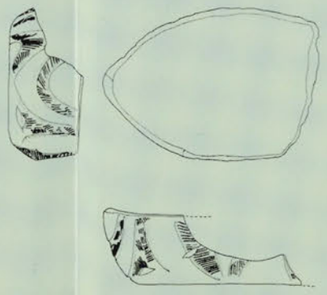
舟形土器～流山市上貝塚貝塚

縄文土器というと、縄文や線の文様、立体的な装飾が施された土器を思い浮かべます。文様のおもしろさとともに、縄文土器には様々な形をした土器が見られます。

今回紹介する遺物は、県道松戸野田線の道路沿いにある流山市の上貝塚貝塚という縄文後期の貝塚を調査中に、地面に掘られた穴の浅いところから出土した舟の形をした楕円形の椀形の土器です。全体の３分の１ほどが欠けていますが、復元すると長さ30cm近くの大きさになります。文様の特徴から見て今から4,000年ほど前の縄文時代後期のものと思われます。保存する区域の調査でしたので、全部掘ってしまわずにどのような遺構があるのかを確認するだけでしたから、穴の形やどのような事情でこの場所に残されたのかはわかりません。

一般的な土器は上から見ると円形ですが、この土器は楕円形になっています。県内での出土例には、千葉県の中野僧御堂遺跡、内野第１遺跡等がありますが、この舟形土器は大きく、きちんとした文様が付けられている点に特徴があります。

縄文土器の形は、深い鉢や甕が主流です。煮炊きのために、水を入れ炉にかけるのに適した形をしていたからです。時代が新しくなると椀や壺など種類が増えてきます。縄文時代も後期・晩期は変わった形の土器のオンパレードで、例えば口の二つ付いた土器、急須の形をした土器、台の付いた土器、香炉のような形をした土器等々数多くみられます。これらの特殊な土器の存在は、煮炊き専用から、お酒のような液体を入れたり、現在ではわからないような使用法が加わったことを示しています。この時期には、土偶や耳飾りなどの土製品が豊富に見られ、まじないや祈りが生活のなかで重要であったことが考えられます。舟形土器もそうした生活の中で作られた土器で、まじないや祈りに使われたと想像されます。



千葉県内の最新出土考古資料の大集合展「地中からのメッセージ」開催中
沼南町石揚遺跡出土旧石器時代石器他21遺跡約850点展示

遺跡今昔物語

水の恵みを活かして～手賀の丘少年自然の家物語

千葉県を代表する湖沼に印旛沼と手賀沼があります。かつて、それぞれの沼は今よりもずっと大きく、魚や貝などの良い漁場であり、舟を使っての人や物の交通路でもありました。海水面の高かった縄文時代の前期には、太平洋から海水が入り込む内海だったこともあります。印旛沼と手賀沼の周辺は千葉県でも遺跡の集中する地域の一つです。

水と緑に恵まれた手賀沼のほとりに、少年たちが自然にふれ、集団生活を学ぶ「千葉県立手賀の丘少年自然の家」が建設されました。このとき、調査されたのが沼南町石揚遺跡です。調査の結果、旧石器時代から古墳時代にかけての生活の跡が見つかりました。時代によってはムラとして利用されたり、墓地だったりしています。旧石器時代に長野県から運ばれてきた黒曜石を材料に石器が作られた跡、方形周溝墓といわれる正方形に溝がめぐる弥生時代の末ころのお墓などが見つかっています。

今、「手賀の丘少年自然の家」では、多くの小中学生が、昔の人々と同じ場所でキャンプ生活を楽しみ、自然の恵みにふれ、集団生活の大切さを体験しています。

石揚遺跡かんたん年表

旧石器時代（約30,000年～12,000年前）

人がくらしを始め、
石器作りが行われ、石器のまとまりが21か所残される

縄文時代

早期（約9,000年～6,500年前）
貝殻の縁で文様を付けた土器が流行する
家が4軒つくられる
炉穴という調理用の炉が39基、
落とし穴21基がつくられる

前期（約6,500年～5,000年前）
縄文で飾られ、植物の繊維を混ぜた土で焼かれた土器が流行する
家が21軒つくられる

中期～後期（約5,000年～3,000年前）
貯蔵用・墓用の穴（土坑）が69基つくられる
家が2軒つくられる

晩期（約3,000年～2,000年前）
ほとんど人が生活しなくなる

弥生時代

後期（紀元2世紀～3世紀）
方形周溝墓というお墓が5基つくられる

古墳時代

前期（紀元3世紀後半～4世紀）
家が5軒つくられる

中期（紀元5世紀）
家が21軒つくられる

後期（紀元6世紀）
方形の古墳が1基つくられる

誰も住まなくなる
・
・

平成元年～2年（1989･1990）

発掘調査が行われる

平成5年（1993）

県立手賀の丘少年自然の家オープン
27,000㎡の敷地に映像ホール・プラネタリウム
300名の宿泊施設・キャンプ場など

平成6年（1994）

県市町村の図書館などで見ることができる、発掘調査報告書刊行される

埋文アラカルト

大きな土偶・小さな土偶

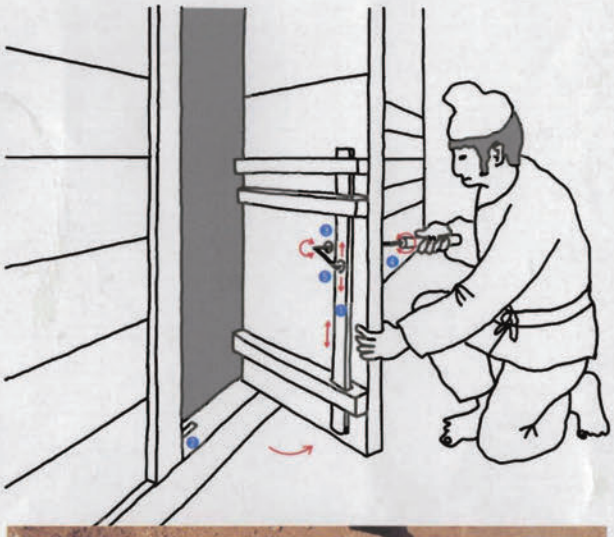
縄文時代には素焼きの人形のようなものがたくさん作られました。現代の私たちは土偶と呼んでいます。いったい当時の縄文人はどんな呼び方をしていたのでしょうか。土偶は女性の胸のふくらみを表したものがついているものがほとんどで、男性像は数例しかありません。大きさは様々で、とても小さいものから、40cmを越えるような大きなものまであります。

写真は佐原市鴇崎貝塚から発見された高さ3.3cmの小さな土偶です。今から約8,000年前に作られたものです。顔の部分がなくなっています。手と足は、作られませんでした。大きな顔は市川市堀之内貝塚から発見された土偶の顔の部分です。顔だけで10cmくらいあり鴇崎貝塚の土偶とは大きさがだいぶ違います。このくらい大きな土偶だといつも持ち歩くことはできませんが、鴇崎貝塚のように小さいと、キーホルダーやお守りのように持ち歩くことができそうです。縄文人はこの土偶をいったいどんな願いを込めて作り、どんなふうに使っていたのでしょう。また、大きさの違いはなぜあるのでしょう。

Q&A

印西市船尾白幡遺跡現地見学会（8月31日）の質問から　発掘調査速報参照

Q「出土品のくるる鍵はどのように使われたのですか。」（印西市中学生ほか）



A 出土品の、鉄の棒を折り曲げただけのように見える鉄製品は、「くるる鍵」といい、その使用法は、右の図のようになります。

ふだん倉庫の扉は、扉の内側の落とし棒（①）が敷居の穴（②）にがっちりとはまっていて外からは開かないようになっています。扉には小さな穴（③）がありますが、小さくて手も指も入りませんし、ただの細い棒などを突っ込んでも扉は開きません。

開けるときにはこの小さな穴に「くるる鍵」（④）を差し入れ（ちょっとこつがいります）落とし棒のくぼみ（⑤）に引っかけ、回転させると落とし棒が持ち上がって扉を開けることができます。この時に、鍵の各部分の長さや太さがぴったり合わないと扉は開きません。「大切な物が本当に守られているのだろうか？」扉の開く瞬間は緊張の一瞬です。現在でも神社の建物などに使用されているところがあります。

平安時代の船尾白幡のムラの人たちにも大切な物がありました。神様や仏様にかかわるもの、来年の米作りのための種もみ、農作業に必要な鉄製の農具などは盗まれては大変です。ですから、ムラの中に頑丈な倉庫を建てて、扉には錠をつけて村の長がその鍵を厳重に管理していたと考えられます。

第一回最新出土考古資料巡回展
地中からのメッセージ

●会場：千葉県立関宿城博物館
平成八年十一月三十日～十二月二十五日
●会場：千葉県立房総風土記の丘
平成九年一月十一日～二月十一日

（表紙写真撮影：堀越知道）